



アシンク

# async——同期しないこと／ 問いかける言葉

## 目標

- 筆者の主張とその根拠を関係づけて読み、筆者の立場やものの見方、考え方を捉える。
- 構成や展開、表現の仕方比べて読み、社会や他者との関わりについて考える。

吟味／A<sup>1</sup>は哲学でできるか

## 主張のよりどころ



## 主張のよりどころ

### 主張の根拠に注目する

説明的な文章を読むときには、筆者の主張とその根拠を関係づけて読むことが大切です。筆者が示す根拠からは、**筆者の立場に基づいたもの**の見方、考え方を捉えることができます。

筆者は、自分の主張をより明確に読み手に伝えるために、論理を展開させる中で、一般的な考え方や事例、他の人の意見などを根拠として示し、文章に説得力をもたせています。このような筆者の主張を支える根拠に注目することで、筆者の立場やものの見方、考え方をどのように読者に伝えようとしているか、筆者の説明の意図に迫ることができます。こうした**主張のよりどころ**、つまりその根拠や筆者の立場に基づいた見方、考え方を捉えることは、文章の信頼性について考えることにもつながります。

### ○複数の文章の共通点と相違点

◇ 筆者の主張とその根拠

◇ 筆者の立場とものの見方、考え方

◇ 文章の展開と表現の仕方

◇ 文章の展開と表現の仕方

◇ 文章の展開と表現の仕方

◇ 文章の展開と表現の仕方

を  
読み  
比べ  
る

### 共通点と相違点

複数の文章を読み比べると、筆者の主張のよりどころについて、特徴や違いがよくわかります。ここでは、二つの説明的な文章の共通点と相違点を考えながら読み進め、自分の考えをまとめたり話し合ったりしましょう。

共通点や相違点を捉えるためには、観点を決めて読むことが必要です。

観点としては、これまで学んできたような、文章の構成や論理の展開、読者を説得するための事例の取り上げ方や表現の工夫などのほかに、次のようなものも考えられます。

- ・ 筆者の職業や社会的な立場
- ・ 筆者の体験、経験などの具体例のあげ方
- ・ 専門用語など、取り上げる言葉やその使い方
- ・ 想定している読者層など

この二つの文章では、社会の捉え方や社会との関わり方について問題提起がなされています。それぞれの問題提起の内容を整理して比較しながら、さらにさまざまな専門の立場からの情報を参考にしたり、自分の知識や経験と照らし合わせたりしながら読みましょう。そして、私たちを取り巻くさまざまな課題について、自分の考えを広げたり、深めたりしましょう。

15

10

5

筆者の主張のよりどころは何か。筆者の主張を理解するとともに、その根拠を読み取り、筆者の立場やものの見方、考え方を捉えよう。



- それぞれの筆者の主張のよりどころを考えながら読んでみよう。
- 二つの文章の共通点と相違点をまとめてみよう。

▼ P 103  
みちしるべ 1 2



アシンク  
async——同期しないこと

さかもと りゅういち  
坂本 龍一

二〇一二年一月、東日本大震災から十か月後の宮城県を訪れた時、僕は津波をかぶった一台の「ピアノの死骸」に遭遇した。そのピアノは、高校の体育館のステージ脇の倉庫で、数日間海水につかっていた。一九六六（昭和四十一）年度の卒業生から記念品として贈られたもので、震災の十日ほど前の卒業式でも演奏されていたものだった。鍵盤はところどころ沈んだままになっていて、弦も切れたりさびたりしている。外側にくつきりと残っている傷、泥水の痕……。痛々しかった。指を鍵盤に沈めてみると、自分の知っている音は鳴らなかった。

しかし僕は、この津波によって生まれた音に強くひかれるようになった。津波ピアノは、地震と津波という自然の大きな力で、ある意味、破壊された存在だ。もともとピアノ自体は木でできている。木は生きていて、自然とともに変化していくものなのに、ピアノは、人間により何トンという人工的な力で鉄や木を曲げて作られたもの。ピアノが奏でる音階も自然には存在しないものだ。

10

5

東日本大震災の直後から、学校で被災した楽器の修復支援を行っていた筆者が出会ったのが「津波ピアノ」です。その姿に、命を奪われたピアノの死骸のような悲しみと衝撃を受けます。

筆者は廃棄されることになつてたこのピアノを引き取り、自動演奏のオート作品としてよみがえらせます。被災地の子どもたちで作るオーケストラの支援など、音楽をおして東北の子どものちとの交流を続けました。

async  
asynchronousの略。同期しないこと。非同期。



被災した体育館に置かれた津波ピアノを弾く

僕たち人間が「調律が狂ってきた」と言うのは、人間的な基準で言っているのにすぎないのではないか。調律というものは、人間が勝手に決めた、人間にとつてのいい音を出す作業ではないか。このピアノは、自然が調律した元の形に戻ろうとしたのだ。人工的な調律から解放された音。いい音だ、とても貴重だと思つた。半ば自然に帰つたピアノで「音楽」を奏でることはできないだろうか。

僕は、サウンドを発する道具として、人間が考案した調律に合わせてつくられた楽器よりも、音楽に加工される以前の音に、これまでよりも興味をもつようになった。今、僕が本当に聴きたい音はどういうものなんだろう。僕は音を探し始めた。

ニューヨークの自宅スタジオの裏庭で聴こえる鳥の声や雨の音、枯れ葉を踏みしめる音、通勤時間帯の新宿駅の雑踏の音……。さまざまな場所の音を録音し集めてみた。近所の楽器屋さんに行つてシンバルを買つてきて、コップでこすつてみて、なにかおもしろい音が出ないかなと試してみた。コップの大きさが変われば、音も全部変わるから、茶碗ちawanやコーヒーカップ、いろんなコップを集めて音を出してみる。そうすると自分の好きな音が出てくる。他にも、振動しているシンバルの上に紙を置いてみたりした。厚い紙、薄い紙。特にわら紙のような薄い紙はすごくいい音がする。僕は身のまわりのさまざまな物が発する音を楽しまたくなってきた。

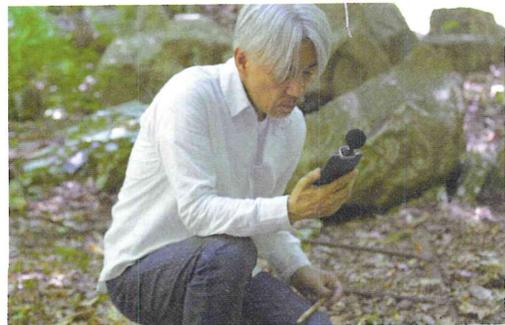
これらの音を、普通は音楽としては聴いていない。雑踏や工場の音などは、むしろノイズとを感じる人もいるだろう。サウンドとノイズは、本来なら二項対立的なものである。人間は、ノイズは排除するもの、意味のないものとしてきた。しかし僕は、そのノイズを聴いてみようと思った。もともと僕は、工事や工場の音が好きで、道路工事の現場があると、立ち止まって録音したりすることもあった。ある人にとってはただの騒音でも、僕にとっては音楽。ノイズもサウンドも人の声も、全ての音が音楽なのだ。

自然の音や都会の雑踏の音、音にはそれぞれ独自のリズムや響きがある。

音は同じ必然性で同じ重要性をもっていて、ゴーツというなんとなく聴こえている音も窓の外から聴こえる通りの音も、存在理由があって存在している。それなのに、人間が勝手にこれはいい音、これは悪い音と決めてしまう。二十四時間ほとんど音に囲まれて生きているのに、生存にあまり必要のない音は無視している。本当はこっちでも音が鳴っているのにそれは聴こえてこない、そういうこともよくある。

それは視覚でも同じで、脳が見たいと思っただけを見てしまう。つきつめれば、人間が持っている脳はフィルター越しに世界を見ている、認識していることになる。そのフィルターは人間を同じ一つの檻わらに閉じこめる。無自覚のうちに「同期」を促すことによって。

九十九%の音楽というのは、同期している音楽、同期を目ざす音楽だ。どうも人間はネイチャーとして、同期することに快感を覚えるらしく、放っておくと同期をしてしまうらしい。



スマートフォンで自然の音を集める

(94ページ)  
意 遭遇

文 痛々しい

対 破壊

意 奏でる

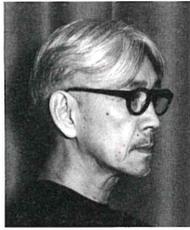
(95ページ)  
わら紙

わらの繊維を原料とした、きめの粗い紙。

類 解放

文 半ば

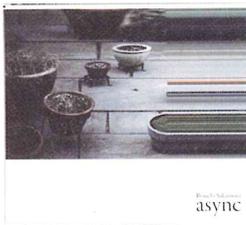
類 雑踏



坂本 龍一 「一九五二—二〇三三」  
東京都に生まれた。音楽家。

著書に『音楽は自由にする』などがある。

《出典》本書のために書きおろしたものである。



アルバム『async』

考えると、知的なレベルではなく、生理的に同期してしまう。例えば十人、二十人集まって、それぞれ好きな高さで「アー」と声を出していると、五分から十分くらいで同じ高さにまとまってきてしまう。みんながそれぞれ好きなリズムで手を叩いていても、絶対に合ってしまう。実は、合わせないほうが人間には難しいのだ。

でも僕は、あえてその同期しない音楽というのをつくってみようと思った。同期していない音楽、いわば誰もしゃべっていない言葉をしゃべること。人工的な音に枯れ葉を踏みしめる音や、動物の鳴き声などを重ね合わせた曲。一つ一つの同期しない音を共存させるのである。合わせない音楽、同期しない一つ一つの音から、楽器の音と自然の音が一体となった新しい音楽を生み出す。

一つのテンポに皆が合わせるのではなくて、それぞれの音やパートが固有のテンポをもつ音楽をつくる。バラバラにテンポを刻む多様な音を使って、あるいは人工的調律から解放されたピアノを使って、楽曲という一定のまとまりのあるものをつくること。これは、僕たち人間社会でも同じではないだろうか。不寛容な時代には、非同期、つまり同期しない音を聴くことが大切なのではないか。

(96ページ)  
フィルター

物事を判断する際に、その基準となる心情や観  
点。

ネイチャー

性質。本質。

考 二項対立

意 必然性

文 つきつめれば

文 あえて

文 いわば

意 不寛容